

ニコラス・ラヴ 『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』 木曜日 (1/3) 第二十五章—第三十三章

田 口 まゆみ

Nicholas Love's *Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ* : part 6.

TAGUCHI Mayumi

第四部

第二十五章 パンを増やして大勢の人に与えたこと

福音書には、われらが主イエスが少しのパンを増やして何千もの人の腹を満たしたという話が二回語られています¹⁾。それらの話で、われらが主の言葉と行いについて福音書が明白に述べていることに注意を払うなら、わたしたちの霊を教え導き、主を愛し、主に感謝し、主を至上の方として敬い拝む気持ちを大いにかき立てることができるでしょう。特にこの話から、われらが主イエスが慈悲深く、礼儀正しく、お優しく、しかも思慮深く慎重であられたことがわかります。

²⁾まず主が慈悲深くあられたという点は、主の「群集がかわいそうだ」(マタイ, 15 : 32) というお言葉に表れています。主は慈悲に動かされ、群集を助けて彼らの空腹を満たそうとお考えになったのです。ダビデが証言しているように「地は主の慈しみに満ちている」(詩篇, 32 : 5) のです。

³⁾また主は、偉大な礼儀正しさと驚くべきお優しさを、このように言われた後で命じられたことに示されました。

「もう三日もわたしと一緒にいるのに、食べ物がない。」(マタイ, 15 : 32)

平成17年6月23日 原稿受理

大阪産業大学 人間環境学部

1) 「5千人に食べ物を与える」(マタイ, 14 : 13-21, マルコ, 6 : 30-44, ルカ, 9 : 10-17, ヨハネ, 6:1-14) と 「4千人に食べ物を与える」(マタイ, 15:32-39, マルコ, 8:1-10) 話。

2) 原注 : Jesus misericors. (慈悲深いイエス)

3) 原注 : Jesus curialis. (いたわりのイエス)

人々は主の癒しを求めて、そうして主とともにいたのであるのに、主は彼らに対して恵みを施されたことで負い目があるかのように言われたのです。本当は彼ら自身の益となつたのであり、主が得をしたわけではないのです。しかし主は、至上のお優しさと礼節、そして無限の善から、そのためにご自身が一切得をされることのないにもかかわらず、わたしたちの益と救済のためだけに「人の子らと共に楽し」まれるのです（箴言、8：31）。ですから正しい生活をして主に続き、主の教えを喜んで聞き、主のお命じになることを守るならば、主はその人たちの心の中にとともに住むことを愛し楽しまれ、困ったときには必ず助けてくださいます。

⁴⁾ [N] さらに、われらが主イエスは、群集の多くが遠いところからやってきていることに配慮され、帰り道で疲れるのだから過度の空腹は人々にとって危険であると判断されたので、こう言われました。

「空腹のまま解散させたくはない。途中で疲れきってしまうかもしれない」（マタイ、15：32）。[n]

まず人々が空腹であることと無力であることに留意されたこのお言葉に、主の思慮深さと慎重さが示されています。[N] その後の労苦に必要な体力をつけるために、前もって助けの手を差し伸べるべく命じられたのです。

⁵⁾ このときの主のお言葉と行いには修道院長など他者の癒しにたずさわる者が手本とすべき思慮分別の教え、模範があります。人々の弱さ、労苦に心を配り、その上で体力を維持するためにふさわしく十分な食物を定め、肉体を持ってこの世に生きていく行程で力尽きてしまわないようにしなさい。[n]

⁶⁾ また上の話から、われらが主イエスがわたしたちの日々の生活を恵み深く治めてくださるということを、霊の導きによって知ることができます。身体や霊のための食べ物は主が下さるのであり、もし主がわたしたちを飢えさせるなら、わたしたちは途中で力尽きてしまうでしょう。主のお力添えがなければ、魂がいくら飢えても自分でどうすることもできません。ですから霊的な行いで魂の慰めや益を感じるとき、それは自分から出たものではなく主のお力によるものに他ならないので、自分自身得意になったり自惚れたりしてはなりません。⁷⁾ 注意深く見るならば、神の真の僕である神に選ばれた人々が、従順であればあるほど、自分自身をつまらない者だと思えば思うほど、より完璧に近い生活を送り、

4) 原注：Jesus discretus. (慎重なイエス)

5) 原注：N. (ラヴの挿入)

6) 原注：B. Notabile. (ボナヴエンチュウラ [原典に戻ったことを示す], 注意点)

7) 原注：Nota. (注意)

神により近く、神の恵みをより多く受けるということがわかります。その人たちは、自分が忌まわしく罪深い者に他ならないとよくわきまえているのです。⁸⁾なぜなら人は神に近づけば近づくほど霊的な目でよりはっきりと見えるようになるので、それだけ神の善、慈しみがはっきりと見えるからです。神の恵みによって光を得た心の中には、霊的に盲目であるために陥る驕慢や虚栄の喜びの居場所、安らぎはないのです。神をよく知り、また自分自身を真摯な目で見つめる者は、死に至る傲慢の罪に染まることは決してないからです。

またこの話には、罪深い者が、主と別れて遠い邪悪の国に行ってしまった場合でも、心から悔いて主の元に戻ってくるならばいつでも、われらが主イエスの慈しみは偉大であるという慰めが語られています。群衆の中には遠くの国から主のもとにやって来た者もあるということで主は群衆に対し特に慈しみの心を示されたと福音書にあるのですから、間違いなく、罪びとに対しても、いくら昔に主のもとを去った者であろうとも、霊的に主のもとに戻りたいと願うならば同じように慈悲を示されるでしょう。アーメン。

第二十六章 人々が主を王にしようとしたときに、われらが主イエスが逃避なさったこと

前章で述べましたようにわれらが主イエスが群衆の腹を満たされた後、人々はその奇跡によって主のお力を知り、困ったときに主が彼らを助けてくださることを知ったので、この世での一時的な益を求めて、主を王にしようと思いました。しかしわれらが主イエスはそれを知って、見つからないように、ひそかに山の中に姿をお隠しになったのです。この山こそ、前にお話しました、主がああすばらしい説教をされた山であるといっている学者もおります。こうして主は一時的な王国、この世での虚栄の賛美を拒否され、逃避されたのでした。

⁹⁾ここで、主が見せ掛けではなく本当に、このように人々から崇拜されることをお避けになった方法についてよく注意してみましょう。まず、主は弟子たちに命じて先に船を出させ、その上でご自分はひとり山に入られました。もし人々が弟子たちといらっしゃると思って主を探しても見つからないようにするために、そうして主をあがめようと主を探す人々から逃れられたのです。¹⁰⁾これは、わたしたちに、一時的な崇拜から逃れよ、という教えを例で示されたのです。なぜならご自分の益のためにその崇拜から逃げたのではなく、一時的なこの世の崇拜を請い望むことがどんなに危険なことかをわたしたちに教えるためにされたからです。

8) 原注：Nota rationem humilitatis. (謙遜の解説に注意)

9) 原注：Notabile.

10) 原注：Nota.

¹¹⁾確かに、この敬われるということは、敵に魂を盗み取られる危険が最も高い罫のひとつで、魂を死の道に引きずり落とし、打ち負かす最も重い荷となります。それは高位聖職者として崇拜されるのであっても、一時的なこの世の王としてであっても、あるいは深遠な知識のために崇拜されるのであっても同じです。崇拜されることに喜びを覚える者は、ほぼまちがいなく死を招く罪の深みに落ちこむ危機に瀕しているか、さもなくば、すでにどっぷりとつかっているかで、これには多くの理由があるとご存知のとおりです。

¹²⁾まず崇拜されることに喜びをおぼえる者は、人々からの崇拜をどのようにして保とうか、あるいは高めようかといつも頭がいっぱいです。聖グレゴリウスが言っているように、「人はこの世のもの、あるいはこの下界の肉のことに執着すればするほど、それだけ魂の喜びから、神と天上の御国を愛することから遠ざかります。」¹³⁾

¹⁴⁾さらに、崇拜されることを愛する者は名誉を保ちあるいは高めるために役立つ友を増やすことに夢中になります。そのため、そうした友を喜ばせようとさまざまな原因から神と自身の良心に背き、罪に陥り、またともに同様を強いるのです。

¹⁵⁾また一般的に、同じく人々に尊敬されている他者を嫌悪し、自分の名声や価値がそれだけ高まるようにそれらの人を中傷し、そうして同輩を憎み、嫉妬するようになってしまいます。

¹⁶⁾また、自分で自分をすばらしく尊敬に値すると考えて、ほかの人にも同じように思っ
てほしいと考え、その結果思い上がり、傲慢、虚栄のおぞましい罪に落ちていくのです。
しかし福音書にあるように、「実際には何者でもないのに、自分をひとかどの者だと思
う人がいるなら、その人は自分自身を欺いています。」(ガラテヤの信徒への手紙, 6:3)で
すからわれらが主は弟子たちに福音書の中でこう言っておられます。

「自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です』と、
心から言いなさい。」(ルカ, 17:10)

自分が立派で崇拜に値すると考える人はこのようには言わないでしょう。

¹⁷⁾ さらに、崇拜されることを好むことが人に根強いものであるという最後の点について

11) 原注: Nota contra vanos honores pericula multa. (虚飾の名声の多くの危険に注意)

12) 原注: Primum periculum. (第一の危険)

13) Gregory the Great, 'Homilia in Evangelia XXX,' PL 76, cols. 1219-27, at 1221.
('commonplace' citation, see, Michael Sargent, ed., *The Mirror of the Blessed Life of
Jesus Christ*, Exeter Medieval Texts and Studies, (Exeter, 2004), p.250, no.103.31.

14) 原注: 2^m.

15) 原注: 3^m.

16) 原注: 4^m.

17) 原注: 5^m.

て述べるなら、人は崇拜を受けるとますます飢え、貪欲になるので、決して満たされることなく、日々新たにより高い崇拜を求め、崇拜を受ければ受けるほど多くを請い求めるようになるということが言えます。褒められればそれだけ自分が前よりいっそう立派で尊敬にあたいする者になってゆくと思ひ、ほかの人にもそう見えると思ひこむために貪欲の罪に深く落ちこむのですが、これこそ最もおぞましい罪で、ほかの多くの罪の根であり原因なのです。

この崇拜されることを喜ぶ虚栄とその危険について聖ベルナルドゥスは特にこのように語っています¹⁸⁾。

「われわれはすべて高貴で立派な生き物で、意志の力も強いのです。ですから高みに上ることを望むのも生来の性向です。しかし、王者の丘へと足を踏み入れる者、[N] 権力の座につき神のようにあがめられたいと願うルシフェル [n] に従うなら大変なことです。そうして傲慢な思いにかりたてられて、高い山を登り、輝ける天使であった者が、突然そこから墜落し、汚らわしい地獄の悪魔と成り果てたのです。」

またさらに、墜落して汚らわしい悪魔となったルシフェルが、邪な嫉妬心から人を至福の園から追い落としてやろうと矢も楯もたまず、自分自身が墜落した王権の丘への道へと誘惑する勇氣はなかったが、これに似たほかの丘、つまり知恵の丘へとだまして誘い、偉くなりたいという傲慢な願いによってこの丘への道を登るよう、「あなたたちは善と悪の偉大な知識を得ることで神のようになるでしょう」（創世記、3：5）と言いくるめたことを思い出してください。[N] この誘いにのったので、人は失墜したのです。王となり高い権力を熱望する気持ちがその天使から天使の幸せを奪い、知恵を望む心が、人から永遠の命という喜びを奪ったのです。これらの不幸の共通の根、原因は、崇拜されることを喜び、望む驕りの心です。

偉くなりたいという虚栄心が危険であることを知りルシフェルと人の墜落を恐ろしいと思うならば、王権や知恵という高い山を避けるのだと心に決めて、われらが主イエスとともに瞑想と祈りの丘を登りましょう。従順な心で、主がなさったように、この世と巷の人々にあがめられたいという気持ちを捨てて。[n]

¹⁹⁾ さて、主が群衆を逃れてひとり山に入られた話を先にしましたが、この福音書の話にはわたしたちの教えとなる点もうひとつあります。それは主が弟子たちと別れ、無理やり彼らだけで船を出させたという点です。彼らは一ときも離れずに主と思いをともにした

18) 原注：Bernardus sermone 4^o de ascensione. St Bernard, 'In Ascensione Domini Sermo IV,' PL 183: 309-16, at 310-11.

19) 原注：Notabile 2^m.

かったし、主と共にありたいと願ってやまなかったからです。それでも主は、彼らにとってどうすれば一番良いかを考え、彼らの望みとは反対のことをお命じになったのです。そして弟子たちも、それほど悲しくつらいことはなかったのですけれど、従順に、主のお命じになるとおりに従ったのでした。

²⁰⁾これは霊的生活をする者が、霊的生活の特別な恵みによって、彼らの心の中にイエスがいらっしやる、あるいはいらっしやらないと感ずることと似ています。彼らは主から霊的な慰めを得、永遠に自分のもとから去らないで欲しいと願うのですが、主はお聞き届けにならず、彼らの最善を期して、思いのままにいらしたり去ったりなさいます。[N] そのような敬虔な魂は、霊的な花婿イエスがそのように遠ざかり、特別の慰めが得られない場合どうしたらいいのでしょうか。きっと彼女は、懸命に何度も、絶え間ない想い、熱心な祈りで夫に呼びかけながら、その間じっと夫の不在に耐えるでしょう。ちょうどイエスの弟子が、主の命令におとなしく従って自分たちだけで船に乗り、主がいらっしやらないまま海を渡り、誘惑と逆境という荒波、嵐を耐えたこと、じっと主が彼らの心に戻ってくださり、次の話に出てくるように、そこに落ち着いて安らがれるのを待ったことに倣って。

この点について聖ベルナルドゥスが、あちこちではっきりと、また敬虔に語っています。それらは特に霊的な生活を送る者たちのために書かれ、あてはまるものですが、そのほかの様々な観想についての説教にも十分書かれていると思うので²¹⁾、これまで何度も彼の権威ある言葉を引いたときにしたようにここでも詳細は省き、このキリストの尊い生涯についての話が、その対象の一般人、純朴な魂にとって退屈にならないようにしたいと思います。アーメン。[n]

第二十七章 われらが主イエスの山上の祈り、そしてその後、船の弟子たちのもとに戻られた話

前章で述べましたように、われらが主イエスの弟子たちが主に命じられたとおりに船に乗り海に出て行った後、イエスはひとり山に登られ、そこでその夜の第四刻²²⁾まで祈りに費やされました。つまりその前の夜の4分の3も祈りを続けられたということで、主はたびたび祈りに専心されたと書いてあるとおりです。

20) 原注：Nota qualiter Jesus spiritualiter recedit ab anima & redit ad eam. (イエスは霊的に心から去っていかれるが、同じようにまた戻ってこられることに注意)

21) Sargentは*The Chastising of God's Children, The Cleansing of Man's Soul*に言及している。Sargent, 250-51, note 105.32.

22) 原文：þe ferþe part of þe niht. 日没から日の出までの夜を4等分した四刻。

²³⁾ それでは、主がどのように祈りをささげられたか、どこまで[N]人として身を低め、[n]天にまします父なる神に対し従順を示されたか、よく考えてみましょう。主はひとりになれる場所を選ばれ、たったひとりで祈りに向かわれました。そうしてそのたおやかなお身体に苦行を課し、長い寝ずの業をされました²⁴⁾。主は、主の羊のまことの羊飼いとして祈られました。主はご自分のためではなく、わたしたちのために、父なる神とわたしたちの間の代弁者、仲介者として祈られたのです。また、主は、わたしたちに、[N]たびたび祈り、祈ることを特に愛しなさいという[n]手本を示されるためにも祈られました。主は弟子たちにもたびたび祈りを命じ、教えられたのです。そうして主は言葉で命じ、ご自身の行いによって示されたのです。主は弟子たちに、絶えず祈らなければならないこと、気を落とさずに祈り続けなければならないことを教えるために、繰り返し祈り願い続ければ必ずや願っていたものを手に入れることができるとお教えになりました。そのために主は、ルカ書の、ある未亡人が長い間懇願し続けたので、最終的に彼女に正しい裁きを行った裁判官のとえ話をされたのでした²⁵⁾。

また、一心の祈りに誘うために、また願いがきくと聞き届けられるように、もうひとつ、困った友人がパンを貸してくれとあまりしつこいのでとうとう貸し与えたというたとえ話をされました。同じ福音書に収められたこの話は、こういう言葉で終わっています。

「求めなさい。そうすれば、与えられる。」（ルカ、11：9）²⁶⁾

²⁷⁾ 主は、良い祈りをあげることがいかに優れているかをわたしたちに教えるためにこれらの話をされました。その力は計り知れず、大きく、偉大なので、すべての善を引き寄せ、どんな悪をも退けます。

²⁸⁾ ですからもしあなたが忍耐強く逆境に耐え、力強く種々の誘惑と困難に打ち勝ちたいなら、祈りの人となりなさい。悪魔が悪巧みを仕掛けたときにそれを知り、嘘だらけの誘いにのらないようにしたいなら、祈りの人になりなさい。肉体の苦役と難業によってまっすぐに天国への道に進み、喜びの神への奉仕を続けたいと思うなら、祈りの人になりなさい。驕りの心を捨てて、聖なる思い、霊的な瞑想と神への献身の想いで魂を満たしたいと思うなら、祈りの人になりなさい。²⁹⁾ 神の御心にそった善い目標を持ち、心から悪を取り

23) 原注：Notabile de oratione. (祈りについての注意点)

24) 原注：Nota qualiter Jesus orat. (イエスがどのように祈られるかに注意せよ)

25) 原注：Luce xviii°. ルカ、18:1-8.

26) 原注：Luce xi. たとえ話は、ルカ、11:5-8.

27) 原注：Notabile. Virtus orationis multiplex. (祈りの複合的美徳)

28) 原注：Homo orationis. (祈りの人)

29) 原注：Nota de perfectione. (完成について注意)

除き、徳を植え付けて、心を堅固にしたいなら、祈りの人になりなさい。祈りによって聖霊の恵みは与えられ、願いをかなえるのに必要なことが教え説かれるからです。また、天の御国について観想し、[N] 選ばれた少数の者だけに許される甘美に心で触れ、言葉で表現することはできない、感じるだけでできる、われらが主なる神の恩寵の贈り物を受けたいならば、[n] 祈りの人になりなさい。特に祈りという行為を通じて観想に導かれ、天上のことを感じるようになるからです。

敬虔な祈りがどれほど大きな霊的な力を持っているか、ここに見ることができます。このこと、またこれまでに述べたことすべてを裏づけして、聖書 [N] や教父たちの言葉 [n] があますところなく証明しているほか、日々の生活の中で実際に、³⁰⁾ 純朴で学問を修めていないさまざまな人が祈りの偉大な力によって、上にあげたようなことすべて、さらにはもっと大きな恩寵を手にするのを見ます。ですからすべてのキリスト教徒は、祈りをささげたいという気持ちに大いにかり立てられねばなりません。なかでも、特に祈りによって生活が規律づけられている修道者たちにとっては重要なことです。

[N] この祈りの力について、またわれらが主なる神が、熱心に祈りをささげる者たちに、彼らが祈りで願ったことをもっとも迅速な方法でどのようにしてお与えになるかについて、聖ベルナルドゥスが敬虔な説教のあちこちで語っています³¹⁾。それらの話は割愛して、わたしたちはわれらが主イエスと弟子たちの、先ほどの話の続きに戻しましょう。[n]

先に申しましたように、われらが主イエスが山の中でひとり祈りをささげておられたとき、イエスの弟子たちは海の上で大変難航しておりました。風は向かい風、折りしも湧き上がった嵐と大波に、船は転覆寸前だったのです。彼らの身の上に敬虔な心を寄せ想像するならば、彼らがどんな困難試練に直面していたかおわかりになるはずです。襲い掛かる嵐、夜の出来事でもあります。なにより、危殆に類して [N] 最後の避難所である [n] 主がそこにおられなかったわけです。[N] しかし、彼らにとって一番よいことをご存知で、しばしの間彼らにこの困苦をお与えになった善き主は、時が来たと思われる、慰め、助けをお送りくださいました。[n] 四刻まで夜明かしをされた主は、山を下り、海の上を彼らの方へいらしたのです。

さあここで想像してみてください。尊い主は、長い寝ずの業と祈りのお勤めの後、おひとり危険な夜の山道を、たぶん石ころだらけの道でしたのに裸足で下りてこられました。

30) 原注：Nota de simplicibus. (純朴な人に注意)

31) 原注：Bernardus super cantica sermone xi° & 86. Item in principio xl sermone v°. ラヴが入れ替えた原典の対応箇所には以下の引用がある：St. Bernard 'Sermo in Cantica canticorum IX,' 'In Cantica canticorum LXXXVI,' 'In Quadragesima sermo V' (PL 183: 178-81, 815-19, 1195-98).

そして水の上を、しっかりと大地の上を歩くように歩まれたのです。創造物は創造主を知っており、[N] その心のままに従う [n] からです。主が船の近くまでこられたとき、弟子たちは主の幽霊だと思い、恐怖のあまり叫び声をあげました。お優しい主は、哀れんで、それ以上彼らが怖がったり苦しんだりしないよう、ご自分の存在を示されてこう話しかけられました。「わたしだ。」[N] つまり彼らが望むお方だということです。[n]「恐れることはない。」(マタイ, 18:27) そのときほかの弟子たちよりも主の力を強く信じていたペトロが、主の命令で主の方へと水の上を歩き始めました。しかし [N] すぐに強い風が吹いたので [n], ペトロの信仰は揺らぎ、恐れを覚えて沈みかけました。善き主は、右手でペトロを救い上げ、命を救われ、二人で船に乗り込まれました。すぐに嵐はおさまり、一帯が静まり返りました。弟子たちは主を拜んで喜び迎え入れ、安心し、主の尊いお姿に心から慰められたのです。[N] 以上が福音書の話の概略です。[n] (マタイ, 18:22-33)

³²⁾ 主の弟子たちに触れたこの話で、主御自身からは祈りの力について学び、苦難に直面したときの忍耐とその効用についての霊的な教えと模範も学ぶことができます。弟子たちには実際に起こったことですが、わたしたちの場合は日々、霊的に起こっているのです。

³³⁾ われらが主イエスは、自らお選びになった弟子たちを、この現世で心身両面において苦難苦行にさらされました。聖書が証言しているように、「主は子として受け入れる者を皆、鞭打たれるから」(ヘブライ人への手紙, 12:6) です。使徒パウロが言うように、「もしだれもが受ける鍛錬を受けていないとすれば、それこそ、庶子であって、実の子ではありません」(前掲書, 12:8)。そのように鞭打たれ、この世で苦難苦行に苦しむことはわたしたちにとってためになるのです。自分自身のこと、自分自身がつまらないものであることを知ることを教えられるからです。また霊的に成長して力を得るので、その力でこの徳をよりよく守ることができ、さらに——この点が一番大切なことですが——この徳によって天国での幸せという永遠の報酬を、しっかりと希望を持って待つことができるのです。ですから苦難、苦行によって悲しんだり、辛抱の心を失ったりしてはなりません。むしろ苦難、苦行を望み、愛すべきです。ところが、苦難、苦行は得るものが大きく、重要で、大きな力を持ち、多くの報いをもたらすのにもかかわらず、多くの人がこれを大変苦にして、我慢できないと不平を漏らすわけですが、それはその力を知らず、理解しないからなのです。

[N] 多くの尊い教父たちが、わたしたちが苦難、苦行を安心して喜んで受け入れることができるよう、その益についてあちこちで教え説いています。その中でも特に聖ベルナ

32) 原注: Notabile.

33) 原注: De tribulacione electorum. (選ばれた者たちの苦難について)

ルドゥスはいろいろな説教でこれに触れています。[n]³⁴⁾ですから、われらが主イエスが、特に大切にしておられた弟子たちをあのように嵐にあわせたり苦勞させたりなされたことに驚くことはないのです。主はそれによって弟子たちが靈的に益を受けるとご存知だったので。弟子たちの船が嵐や逆風で危険にあった話はいくつもありますが、転覆したこともなければ完全に破壊されたとかという話はひとつもありません。ですからどんな苦難に遭遇しようとも忍耐強くこれに耐え、われらが主イエスが必ずわたしたちを苦難からお救い下さるということを固く信じるならば、わたしたちも完全に破壊されたりすることはないのです。

第二十八章 ファリサイ派の人々などがイエスの言動を中傷したこと³⁵⁾

実際には善いことで真実であるのに、わたしたちの言動を時をねらって中傷する者があっても驚いてはなりません。われらが主イエスにもそのようなことがしばしば起こりましたが、もちろん主がお言葉や行いで間違いをされるはずがないからです。あるときファリサイ派の人たちが主に「なぜあなたの弟子たちは食事の前に手を洗わないのですか」と尋ねました（マタイ、15：2）。先祖代々伝わる習慣を守らなかったからです。主は、彼らが内なる魂の徳高さと靈的な清らかさよりも外面の汚れを落とすこと、身体の汚れに拘泥したので、きつい言葉で反駁し、[N] 彼らは伝統と身体的な慣例のために神の言葉を無にしたと責め、心から出てくる悪は、手を洗わずに身体のための食事をするよりも人を汚すと、はっきりと言われました。そこで人々は主を中傷し、迫害しましたが、主はこれを一切意に介されませんでした。なぜなら彼らは悪意のために心の目が見えなくなっていたのだからです。（マタイ、15：1-20；マルコ、7：1-23）[n]

³⁶⁾また主は安息日にもしばしば奇跡を働かれましたが、それはユダヤの人々にとっての神の祭日であり、今のキリスト教徒にとっての日曜日にあたる日であったので、ユダヤ人たちは困惑してイエスを責めました。彼らは主のみ心のように靈的に掟を理解し遵守することより、彼らの掟を行為の上で守ることにこだわっていたからです。神はその祭日に善い行いや慈善の行いをもしてはいけなとおっしゃてはおらず、罪と身体を使う仕事をやめ慎むようにと命じておられるのです。そこで彼らはひどい中傷をしました。つまり安息日を守らない者は神に反逆するものだと言って主を中傷し、主を殺すことを企んだのです。

34) 原注：Bernardus super psalmum qui habitat sermone xvi. Item cantica xiii^o, xxv^o & lxxxv^o

35) 原注：De scandalo: B. Capitulo 31^o. (中傷について：ボナヴェンチュラ原典 第31章)

36) 原注：B. Capitulo 26.

それでも主は安息日に奇跡を働き、慈善の仕事をするをおやめにはならず、むしろユダヤ人の間違いを戒めるためにますます多くの働きをされたのでした。

³⁷⁾また別の折には、会堂で神の言葉を語っておられたとき、「わたしは天から下ってきた命のパンである」（ヨハネ、6：35, 48；6：41, 50, 58）、救われて永遠の命を得る者は皆、主の肉を食べ、主の血を飲まなければならない（ヨハネ、6：53-56, esp. at 54）と言われました。ユダヤ人たちはこの言葉を霊的ではなく肉の言葉として考えたので、主に不満を示し、中傷したのでした。主の弟子たちさえ、多くが肉の言葉と誤って主を捨てました。しかしペトロは、12人の弟子を代表して「あなたは永遠の命の言葉を持っておられます」と答えました（ヨハネ、6：68 in 6：60-71）。そのように悪にとっての中傷は、善にとっての徳となるのです。

³⁸⁾上のような主の言葉と行いは、わたしたちも不当な中傷を受けたとき、あるいは人々の嫉妬や悪意のために、善い行いをやめてしまってはならない、特に魂の癒しに必要な行いはいかなる中傷を受けようともやめてはならないという模範です。

³⁹⁾[N] ですから聖グレゴリウスが、上昇しようと思うならばむしろ中傷に甘んじるべきであり、真実を捨ててはいけないと言っているのです⁴⁰⁾。真実には、教父たちに共通の表現で三種類あります。第一に、中傷のために善い生活の真実を捨てないこと。つまり、中傷を払いのけるためにいかなる死の罪をも犯してはならないということ。⁴¹⁾第二に、学者や説教師は——ある種の真実では、聴衆にそのまま伝えた場合に過ちを直そうとするどころかむしろ罪を深くすると見て取ったときに、言い控えることがありますが、それ以外——中傷のために嘘を教えたり説いたりしないこと。

⁴²⁾第三が審判の真実で、中傷のために捨てられることがあってはなりません。つまり裁判官は偽りの判決を言い渡してはならないし、証人は中傷のために嘘の証言をしてはなりません。一方、魂に危険を招くことなくやめることのできる一部の行いは、それ自体善い行いであっても中傷の原因とならないように差し控えることもできます。使徒パウロの言葉を借りるなら、「肉を食べることで兄弟に中傷の材料を与えるなら、むしろ肉を食べないこと」（1コリ、8：13）です。[n]

37) 原注：B. Capitulo 31.

38) 原注：Notabile de scandalo. (中傷についての注意点)

39) 原注：N. Gregorius. Primum. Veritas Vite. (1. 生活の真実)

40) 原典不明。

41) 原注：2^m. Veritas doctrine. (2. 教義の真実)

42) 原注：3^m. Veritas iusticie. (3. 正義の真実)

⁴³⁾われらが主イエスのこの話から、内面の徳・力を持たない身体の清潔さや外面的な礼儀作法より、直接徳にかかわる心の清浄に留意しなければならないということ学びました。⁴⁴⁾[N] 身だしなみや身体の清潔さは、虚栄心や贅沢、異性を惹きつけたいという願望やそのほかの罪に結びつかない限りは良いことですし、理由があって守らなければならない善い慣習もしかりです。しかし神の掟と聖教会の上からの命令にはもっと留意しなければなりません。多くのキリスト教徒、特に修道者たちがこの点で間違いを犯します。身体的な規範や習慣に拘泥するが、それは美德とは無関係のことであり、しばしば道理に反するものです。慈愛、従順、忍耐、熱心な祈り、分別ある断食、そのほかの徳についての神の掟、教父の教えに従うことの方が重要なのです。そのような人は、ファリサイ派の人を公然と叱責されたわれらが主イエスの密かな叱責を恐れるがよろしい。[n]

第二十九章 主を愛してこの世を捨てた人すべてにわれらが主イエスが約束なさった特別な報酬について

⁴⁵⁾徳の完成のためにこの世での富を手放すことができなかつた金持ちの男の話(マタイ、19：16-30、マルコ、10：17-31、ルカ、18：18-30)をなさったときに、われらが主イエスはこう言われました。

「金持ちが天の国に入るのは難しい。」(マタイ、19：23；マルコ、10：23、ルカ、18：24)

仲間の12人の弟子を代表して使徒ペテロが、主のためにこの世のすべての物を捨てたならどのような報酬が得られるのかとお尋ねしました。主は答えて、弟子たちに天の国での至福という至上の報酬を約束されたばかりでなく、主のために、父、母、そのほかの家族とこの世での財を棄てた者すべてに、⁴⁶⁾この世では百倍の報いを受けることと、後の世では永遠の命を得ることを約束されました。(マタイ、19：28-29；ルカ18：29-30、マルコ、10：29-30)

⁴⁷⁾ですから霊的生活に帰依しこの世を完全に棄てた者は皆、このイエスの約束に霊的な喜びと特別の慰めを得るのです。この恵み深い約束によって天の国での永遠の命を固く信じていることができるだけでなく、この肉体を持った生においても、もしイエスを心から愛し、

43) 原注：Nota contra plures & specialiter religiosos quosdam. (さらに多くの点について特に宗門にある者が注意すべきこと)

44) 原注：N.

45) 原注：B.N. (N. expansion of B)

46) 原注：De centuplo promisso. (百倍の約束について)

47) 原注：Notabile.

完全にこの世を棄てるならば、百倍の報いを感じることができるのです。それは金でも銀でもなく、贅沢な食事でも効果な衣服でもなく、心のうちでこれを経験した者のみができる、さまざまな美徳という霊的な富と聖霊の慰めで、数ある中でも特に、清らかな良心、魂の安息、清貧、貞節、忍耐、そのほかの徳に対する愛なのです。そしてわたしたちの霊的な伴侶であるイエスが、望まれるとき、望まれる人に、⁴⁸⁾主の感覚的存在が身体と魂の両方に感じられ、それはこの世の肉体的快感すべての百倍どころか千倍を超えるものなのです。

⁴⁹⁾ [N] このイエスの特別の贈り物は、上にあげた霊的な人々には示されますが、この世のことに夢中になり慰めを求める肉的な人からは隠されています。預言者ダビデはこの贈り物を感知し、神にこのように語りかけました⁵⁰⁾。

「主よ、御恵みはいかに豊かなことでしょう。あなたを恐れる人のためにそれを隠される。」（詩篇、30：20）

これについて聖ベルナルドゥスは敬虔な説教を残し、『シモンとイエスの対話』と称されるその中でこの霊的な報酬とイエスが私たちにお与えになるものについて詳しく語っています⁵¹⁾。アーメン。[n]

第三十章 われらが主イエスが山上で姿を変えられたこと（マタイ、16：21-17：9， with parts from ルカ、9：21-36；cognate マルコ、8：31-9：9）

[N] われらが主イエスは、主が神であり人であるという真実を弟子たちがしっかりと信じることができるように、人であるという証拠として人の苦しみを苦しまれ、人に共通の弱さに苦しまれました。そして神であるという証拠として、一般常識、人の力を越えた奇跡を働かれ、同時に人として苦しくつらい死に方をされなければならないこと、その後神として輝かしく復活なさるということを伝え、語られました。この目的を達成するために、マタイ、マルコ、ルカの各福音書が伝えるように⁵²⁾、主はエルサレムで多くの人から責められ、蔑まれなければならない、最終的には殺され、そして三日目に死から復活されることを弟子たちに語られ、最後に、そこにいっしょにいる弟子たちの中には、人の子である主ご自身が王国に入られるところを見るまで、つまり神の国にふさわしい驚くべき、歓

48) 原注：Nota speciale donum gratie. (特別の恩寵に注意)

49) 原注：N.

50) 原注：Quam magna multitudo dulcedinis tue domine &c. (引用聖句)

51) St. Bernard, 'Sermo in Verba Evangelii: *Ecce nos reliquimus omnia*,' PL 184:1127-32, cited in *Meditationes*.

52) 原注：Mathei 17° Marci 13° Luce 9°. (実際の典拠とは章が異なっている)

喜をもたらす輝かしい人のお姿をお現しになるまでは、決して死なない者がいるとおっしゃいました。(マタイ、16：21, 28；マルコ、8：31, 9：1, ルカ、9：22, 27)そしてこの約束を果たすために、それからおよそ八日後、[n]主はペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴ってある高い山に登られました。[N]学者たちが言うところでは[n]タボルと呼ばれていた山です。そしてそこで彼らの目の前で主が姿を変えられました。つまり、^{しもべ}僕の卑しい似姿から、神の国を表す高貴な輝かしいお姿に変わったのです。顔は太陽のように輝き、服は雪のように白くなり、そこにモーセとエリヤが現れ、イエスがエルサレムで遂げられようとしている受難について主と語り合っていました。(ルカ、9：31) [N]この至福に満ちた光景に弟子たちは恍惚としていましたが、特にペトロはこの世のことをすべて忘れてずっとその至福の場所にいたいと思い、こう言いました。

「主よ、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。お望みでしたら、ここに仮小屋を三つ建てましょう。ひとつはあなたのため、ひとつはモーセのため、もうひとつはエリヤのためです。」(マルコ、9：5、マタイ、17：4、& ルカ、9：33)

ペトロは、自分でも何を言っているのか、わからなかったのです。(ルカ、9：33) イエスとともに至福の中にいたいのであれば、まず前に言われたようにイエスとともに十字架を背負わねばならないという点でも、また3人が霊的に法と預言者とイエスを表し、三人でひとつであるのにそれを三つにわけようとしているという点でも。[n]そこで主は弟子たち、つまりペトロとその仲間が、イエスが神の子であることを信じるよう、そしてすべてにおいてイエスの言うとおりにし、ついていかなければならないということをしっかりと彼らに教えるために、光り輝く雲が彼らを覆い、その雲の中から天の父の声が聞こえ、こう言いました。

「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け。」(マタイ、17：5；ルカ、9：35、マルコ、9：7)

[N]つまりイエスの教えすべてが神の心に適う。イエスは間違いなく真実そのものだから。そしてイエスの示す道をイエスについて行くこと。イエスこそ誤ることなく正しい道だから。これは法、つまりモーセに、またエリヤによって表される預言者たちの言葉で知っているはずである、ということです。[n]弟子たちは、天の父なる神の声を聞いて地に顔を付けてひれ伏し、非常に恐れました。人は弱いので人を超えた天からの声に耐えることができないのです。そこでわれらが主イエスは優しく彼らを助け起こし、恐れることはないと言われました。弟子たちが顔を上げて辺りを見まわすと、イエスのほかにはだれもいなかったのです。[N]一同が山を下りるとき、イエスは、人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはいけないと弟子たちに命じられました。

以上が福音書の話です。ここに、霊による理解とその甘さを恵まれた者は皆、人である自分を低く卑下すること、神を激しく信じ愛することの重要性を学ぶでしょう。特に、特別な恩寵によって生来の力を超えた感覚を持つ者は、多くの霊の慰めを味わい持つことができるのです。イエス・キリストがそれをわたしたちにお与えくださいますように。アーメン。[n]

第三十一章 エルサレムのベトサダ⁵³⁾と呼ばれる池で癒された病人について（ヨハネ、5：1-18）

エルサレムの町に五つの扉で閉じられたため池がありました。この池の水で生贄に捧げる羊が洗われ、[N]一部の学者の意見によれば、[n]キリストの十字架に使われる木が沈んでいたということです。年に一度奇跡が起こり、神の天使によってその池の水が激しく波立ち、その水に最初に入った人はどんな病も癒されました。そこでたくさん病気の人がその池の回りに一年中、天使によって池が波立つのを待ち、とどまっていました。そのような病人の中に、三十八年も身体が麻痺して床に寝たきりの男がいました。われらが主イエスはその人を安息日に癒し、[N]「床を担いで行きなさい」と言われました。福音書にはこの話をもっと詳しく語られています。[n]

⁵⁴⁾この話で、特に三つのことを学ぶことができます。まず、われらが主イエスがその病気に人に「良くなりたか」と聞かれたということから、われらが主なる神はわたしたちが良くなりたかと思ひ、願わない限り恩寵を与え、魂を癒しては下さらないというがわかります。ですから罪深くありながら、神が魂を癒し救済してくださることを願って神に従うことをしない者たちは、弁明の余地なく地獄行きです。聖アウグスティヌスが言うように、「あなた無しであなたを作られたお方は、あなた無しであなたを正しいとはお認めにならない」のです⁵⁵⁾。

⁵⁶⁾第二の注意点は、罪を取り除き清らかになった後でふたたび故意に罪に落ち、当然のことながらその恩知らずの行いをそれだけ厳しくわれらが主イエスに罰せられるということがないように、注意専心しなければならないということです。それで主はその病人に、病を癒された後、「行きなさい。もう罪を犯してはいけません。さもないと、もっと悪いことが起こるかもしれない」（ヨハネ、5：14）と言われたのです。[N]というのが、心の病、

53) 原文：probatia piscina（池の別名）

54) 原注：Notabilia. Primum

55) St. Augustine, 'Sermo CLXIXm' PL 38:915-26, at 922.

56) 原注：Secundum.

つまり罪によって身体の病気がもたらされるからです。ですから罪を取り除き、赦免されることで、身体が肉体の病から癒されることがよくあるのです。[n]

⁵⁷⁾ 第三の注意点は、邪悪な者たちはほかの人の徳高い行為を悪いことのように曲げて考えることを喜び、そのために自分たちの報いを失ってしまうが、他方善い人はすべてのことを良い方に考え、それだけ自分の報いも増やすということです。

ユダヤ人たちは、その病人がわれらが主イエスによって奇跡で癒され、命じられたとおり安息日に自分の床を担いで行くのを見て、誰が床を担げと命じたのかと尋ねましたが、誰が彼を癒したかとは尋ねませんでした。彼らは非難に値すると思われる点だけを取り上げ、賞賛に値する点は無視したのです。彼らはわれらが主イエスの働かれた奇跡のすべてを同様に扱いました。同じように、世俗的、肉的な者は、善い霊的な人がよい部分を評価することを悪い点を見て悪いことにしてしまうのです。慈愛の生活をし神を恐れる者は正しく暮らし、万事を一番良い点で評価し、栄えるときも逆境のときもそのことを神に感謝します。神はすべてのことを神が望み、あるいは許すように図られるので、いかなる場合も霊的な人は勝利し報いを得るといえることがわかっているからで、そう、それで、聖ベルナルドゥスがあちこちで述べているように⁵⁸⁾、自分の罪からも、ほかの人の罪からも、ひいては悪魔の仕業からも益を得て、霊的に勝利するのです。

⁵⁹⁾ このようにどんなことが起こってもそれを良い方向に考えることのできる恵みを受けた人は誰でも、苦難や誘惑を難なく耐えることができ、その末には魂の大いなる安らぎを得て、どのようなことにも心を乱されることがほとんど、あるいはまったくなくなるでしょう。しかしこれは、賢人の言葉で証明すべきでしょう。「神に従う人にどんな運命が降りかかろうと、それは彼を悲しませない。」(箴言、12：21)⁶⁰⁾

⁶¹⁾ さらにこの話の中で特に天使についての記述から、天使は、聖ベルナルドゥスが言うように⁶²⁾、神と敬虔な霊とをつなぐ者、手段であると理解すべきです。ですからわたしたちは天使を拝み、称え、天使に感謝しなければなりません。天使はいつでもわたしたちと

57) 原注：Tercium.

58) 原注：Bernardus cantica v, xiiii, liiii. St. Bernard, 'Sermo in Cantica canticorum XIV,' 'In Cantica canticorum XL,' and 'In Cantica canticorum LIV' (PL 183 : 839-43, 981-84, 1038-44), cited in *Meditationes*.

59) 原注：Nota bene.

60) 原注：Non contristabit iustum quicquid acciderit ei (from the Vulgate) : (共同訳)「神に従う人はどのような災難にも遭わない。」この後 原文：In capitulo de chananea 30

61) 原注：Nota de angelis. (天使について)

62) St. Bernard, 'In Psalmum XC, *Qui habitat* Sermones XVII' (PL 183 : 185-254), at 'Sermo XII,' col. 233, cited in *Meditationes*.

ともにいてくださるので、天使が怒るようなことは考えたり言ったりしたりしないようにしなければなりません。天使は神が定めたわたしたちの守護者であり、わたしたちの霊的な益のために日夜専心してくさるのです。この点について聖ベルナルドゥスは『詩篇について』という書、「説教：いと高き神のもとに（詩篇，91）：11，主はあなたのために、御使いに命じてあなたの道のどこにおいても守らせてくださる」，および「雅歌についての説教 71」に述べています。

第三十二章 われらが主イエスが神殿から神の掟に反して売り買いしていた人々を追い出されたこと（マタイ，21：12-17，マルコ，11：15-19，ルカ，19：45-48；ヨハネ，2：13-22）

福音書にはわれらが主イエスが神殿から、そこで売買していた人たちを追い出したという記述が二回あります⁶³。縄で鞭を作ってなされたその行為は⁶⁴、主が働かれた奇跡の数々の中でも驚くべきものに思われます。神として至上の力を示されたほかの奇跡の場合、ファリサイ派の人や律法学者たち、そのほかのユダヤ人たちが主を蔑み責めたたえたのですが、ところがこのときは、神殿に集まった厳かな群衆に取り囲まれていたので、何もすることができなかつたのです⁶⁵。なぜならば、よりによって最もあがめられるべき場所で父なる神が冒瀆されていることに対する主の激しい霊の炎が外に向かって噴出して、恐るべき形相となり、人々は驚き恐れ、おろおろして、主に立ち向かうことができなかつたのです。

[N] 聖グレゴリウスやそのほかの学者の解説によると、この話はすべてのキリスト教徒にとって恐るべきものでありますが、[n]⁶⁶特に修道院長や司祭、その他聖教会の者たち、中でも神の神殿に身をおいて絶え間ない熱心な祈りとそのほかの霊的仕業によって神にお仕えすべきわたしたち修道者にとって恐るべきことです。もしわたしたちが欲や虚飾^{なりわい}に身を売り渡し、この話の人々のように生計のためからであっても、現世的な生業や商売^{なりわい}にかまけたならば、イエスの怒りを買ひ、この世では恩寵から放り出され、後には永遠の主の至福から遠ざけられることを恐れるがいいでしょう。

ですからイエスの怒りを恐れたくないあなたは、力の限り、世俗的な生業^{なりわい}に故意に首を突っ込んだりかかわったりすることが決してないように気をつけなければなりません。

63) マタイ，マルコ，ルカの話と，ヨハネの話。しかし，二種の話をも混同して引用しているようである。

64) ヨハネ，2：15。

65) ルカ，19：47-48のみ。Cf. マルコ，11：18。

66) See Sargent, p.252, note 115.37-8: 'more negative in tone than in the comparable passage in the original.'

[N] この点については、さまざま書物のこの福音書の話の解説で詳しく丁寧に扱われていますので、ここでは簡単に済ませることにいたします。[n]

第三十三章 マルタとマリアの姉妹がわれらが主イエスをお迎えしたこと。そして聖教会における活動生活と観想生活について (ルカ、10：36)

あるときわれらが主イエスは弟子たちと、マルタとマリアの城と呼ばれるベタニアに入れられ、彼らの家に立ち寄りました。マルタとマリアは心の底から主を愛していたので、主の訪問を大変喜びました。そこで、家を切り盛りしていた姉のマルタはすぐに忙しく準備に取り掛かり、主と弟子たちにふさわしい食事を言いつけるために動き回りました。しかし妹のマリアの方は、身体のための食事のことはすっかり忘れ去って、何よりわれらが主イエスから霊の食事をいただくことと目と心と耳を主の方にだけ向けて主の足元の床に腰を下ろし、言葉では言い表すことができない喜びと快感のうちに、霊的な食事を頂き、われらが主イエスの尊いお言葉に慰められたのでした。主は何もしないでいることは好まれなかったもので、いつものように、永遠の命の教えと言葉を熱心に語られたからでした。マルタは、[N] 家事の差配と主と弟子たちのもてなしにせわしく立ち働いていたのですが、妹のマリアがそのように座り込んで怠けているように見えたので [n] 腹を立て、主がそのことを一向に意に介していないので不平を言い、立ってもてなしを手伝ってくれるように妹に言ってくださいとお願いしました。マリアは、その甘美な安息、霊的な快感から引き離されるのかと恐れていましたが、何も言わずに頭をたれて主のお言葉を待ちました。[N] するとわれらが主は答えてマルタに言われました。

「あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただひとつだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」(ルカ、10：41-42)

そこでマリアは大変慰められ、主の話聞くためによりしっかりと腰をすえ、マルタも嫉妬することなく、自分も認められたと解釈し、喜んでもてなしの仕度続けました。

⁶⁷⁾以上、福音書の記述に沿ってマルタとマリアの話に簡単に触れましたが、ここにわたしたちのためになる多くの霊的に美しい事柄を認め理解することができます。まずはじめに、われらが主イエスとそのマルタとマリアの姉妹の貧しい住まいに親しげにお立ち寄りになり、そこでの粗末な食事とありあわせの身体のための食べ物を喜んでおいしく召し上がったという、主のお優しさが書かれています。妹は自分にばかりもてなしをさせるとい

67) 原注：N.

ったマルタの言葉によく表れているように、召使が大勢いたはずはなく、ということは種類豊富な食事、珍味や美酒が並んだわけではないのに、われらが主は習慣的に、ほかの誰の家よりもしばしばその家をご自分から訪れて、身体のための食事をとられました。それは、思うに、回心したマリアにことさらに愛情を抱かれたからで、前にも申しましたように、その後マリアが生涯変わらぬ愛情を主にささげ続けることをご存知だったからでしょう。

ですからわれらが主イエスは、まことの悔悟と償罪によって罪を捨て、主への愛を守り続ける人の魂を愛し、恩寵によってたびたび訪れ、靈的にそこに住まわれると思われます。

主よ、この二人の姉妹、特にマリアは、尊いイエスを客として家にお迎えしどれほど嬉しく心弾んだことでしょうか。⁶⁸⁾福音書の記述から推測すると、主がこの家を訪れたのはこのときがはじめてで、前に話したマリアの回心のすぐ後のことでありましたし、何よりも愛し、唯一望んでいたことなので、それだけいっそう喜ばしいことであったのです。姉のマルタは妹の心の中の思いを知りませんでしたから、以前は一緒に身体を使う仕事に慣れていたのですっかり振る舞いが変わり、今ではまったく興味を示さず、述べましたように座ってただ甘美なイエスの観想にひたっているのを見て大変驚きました。それで普通女性がしがちなように妹を直接責めるのではなくて、主に不平を言ったのです。立派に活動的な生活に従事する人は、じっと観想的な生活をする人を、たとえその人が怠惰に見えようとも責めてはいけないという証し、例です。[n]

活動生活と観想生活について

[N] この二人の姉妹マルタとマリアによって二種類のキリスト教徒、つまり活動生活と観想生活が表されていると聖者、博士たちが書いています。このことについてはたくさん説教や立派な話がさまざまな博士たちによって成されました。特にボナヴェンチュラはこのキリストの生涯についての書物の中で聖ベルナルドゥスの権威をたくさん引いて長い論述を展開しています。この論述は多くの靈的生活者にとっては大変優れており、大きな結実のあるものではありませんが、英語でしたためた本書の対象である多くの一般信徒、純朴な魂には、これまでもたびたび申し上げましたとおり、大部において不適切であるように思われますので、ここで、わたしたちの目的に効果的で教育的であると思われる箇所から簡単に抜粋するだけで済ませたいと思います。

⁶⁹⁾まず第一に、前述のボナヴェンチュラによるこれら二つの生活様式、活動的および観想的な生活についての論述は、特に修道院長、説教師、修道者などの靈的な人々のために書かれたものであるという点をおさえておかなければなりません。[n] ですから彼は冒頭で、

68) 原注：Nota.

69) 原注：B.

マルタによって象徴される活動生活には二つの種類があると述べます。

⁷⁰⁾ 第一の種類^{なりわい}の活動生活では、人の仕事が主にその人自身の靈的益である、つまり罪から身を引き、徳を増やすよう改めることでためになるような肉体労働に立脚しています。

[N] まずその人自身のためになり、後に正義と哀れみの仕事、慈愛の行いによって隣人たちのためにもなります。このことについては、後でもっと詳しく述べましょう。[n]

⁷¹⁾ 活動生活の第二は、ある人の生業、仕事が、その分自分自身の報酬につながるとはいえ、まずほかの人の益のための労働である場合です。たとえばほかの人を治めたり、教えたり、魂の癒しのために手助けをしたりということ、修道院長、説教者、その他魂の治癒に携る者によってなされます。

観想生活は、これら二種の活動生活の中間に位置し、次のような順序⁷²⁾ まず人は身体を使って労働し、次に祈り、聖書の勉強、その他共同体の中での良い仕事に従事します。生活を改善し、悪から身を引き、徳を得ることで益を得る。⁷³⁾ その後第二の段階として静かに観想する、つまり少なくとも心の中でひとりになり、すべての世俗のことを捨て、全力で、ひたすら神について、神の国のことについて考え続け、神に喜んでいただくことのみを目指します。⁷⁴⁾そして次に、以上の二つの営みを完璧に習得し、まことの知恵と徳を確立して、恩寵によって照らされ、ほかの人の靈的益を望むままでにいったならば、そこではじめてほかの人の癒しや指導にしっかりと従事することができます。

この順序に従って、まず活動生活の第一部で人の霊は罪から清められ、徳によって力をつけ慰められなければなりません。その後、観想生活によって教え導かれ、光を与えられ、そして第三段階としてほかの人たちの指揮、益のためにしっかりと歩みだすのです。

⁷⁵⁾ [N]以上簡単に触れた話で、ボナヴェンチュラは、これら三段階、つまり第一の活動、第二の観想、そして第三の活動生活の第二段階、これらすべての裏づけとして聖ベルナルドゥスの権威をたくさん引用しています。詳しく述べていることはできませんが、この話には観想のすばらしい解説と聖ベルナルドゥスからの引用がたくさん含まれています。なぜならば、上の第二段階の観想の状態にいる人でも、以上の正しい順を経て到達した、第三の完成した活動生活の人の場合でも、説明が少なければそれだけ害があるからです。今日男女を問わず、修道僧や尼僧をはじめとした観想生活をしている人の中に、上に述べた

70) 原注：Prima pars vite actiue. (第一の活動生活)

71) 原注：2^a pars. (第二の活動生活)

72) 原注：Primo.

73) 原注：2^o.

74) 原注：3^o.

75) 原注：N.

ような活動生活の段階を踏んでいないために観想生活とは実際どういうものなのかよくわかっていない人がたくさんいるのです。順序だてた三段階の生活の霊的訓練をしないままに完成段階にいたり、聖者の、特に「隠者」などという名前を冠することが大変危険で恐ろしいことであることは言うまでもありません。[n]

聖グレゴリウスは言っています⁷⁶⁾。世俗の生業なりわいから逃れて静かな生活につく人で、徳の仕事に専心しない人がたくさんいる。そうして静の生活はしばしば墮落するので、外界での仕事をやめると、怠惰さから、それだけ不浄な考えの雑音を集積するようになる。怠惰と無為に日を送るすべての人について、予言者エレミヤは *viderunt illam hostes & deriserunt sabbata eius*と言っています(哀歌, 1:7⁷⁷⁾)。つまり人の敵である邪悪な霊は、そのような怠惰な霊の暮らしを見て、彼らの静の生活を笑う、という意味です。なぜなら外界の仕事から遠く離れた霊は、清い暮らしで神に仕えるものと思われているが、実際は怠惰のうちに暴君、邪悪な霊に仕えているからです。

⁷⁸⁾ 同じく聖グレゴリウスが同じ書物の中でこれら二つの生活、活動生活と観想生活について述べ、人の霊はまずかりそめの喜びと虚栄を求める気持ち、そしてすべての肉欲や欲望の楽しみ好みを拭い去り、清められなければならない、そうしてはじめて感想の段階に臨むまでに高められうると言っています⁷⁹⁾。⁸⁰⁾ そのたとえ、証明として、神がモーセに掟を言い渡したとき、一般の民は山に近づくことも禁じられたことがあげられます。意志弱く、この世の事柄を望む民たちは観想の高みに上るなどという大それた考えは持ってはならないのです。

さらに観想生活に入りたい人は自分にその力があることを示さなければならないとして、次のように言っています。⁸¹⁾ まず、仕事面で徳を働くことによって能力を証明すること。つまり絶え間ない懺悔をすること。⁸²⁾ 隣人たちに害を与えなかったかどうか、ほかの人から与えられた害や不当な待遇を忍耐強く耐えることができるかどうか。⁸³⁾ またかりそめの事物が手元に来たときにそれを心の中で喜んだり好んだりせず、⁸⁴⁾ 逆にそれらが取

76) 原注：In moralium libro v^{to}, capitulo 20. Gregory the Great, *Moralia in Iob*, PL 75 : 705-05.

77) Cf. 共同訳：「絶えゆくさまを見て、彼らは笑っている。」

78) 原注：In moralium libro 6, capitulo 23^o.

79) Gregory the Great, *Moralia in Iob*, PL 75 : 758-59.

80) 原注：Figura. (たとえ話)

81) 原注：1.

82) 原注：2.

83) 原注：3.

84) 原注：4.

り上げられたときに沈んだり悲しんだりしないこと。⁸⁵⁾また、すべてのこの世的な物に対する愛着、その想像に打ち勝ち、心から追い出すだけことができるほど強い愛情を霊的なものに対して心に感じるかどうか。そうして現世を超えたそのものに到達したいと焦がれることで、生まれもつての人の性^{さが}を乗り越えることができる。このようにグレゴリウスは言っています。⁸⁶⁾

⁸⁷⁾これに関して、聖ベルナルドゥスやその他すべての学者一般が、観想生活にはいたいと思う人はまず活動生活の行いによって証明される必要があると言っています。このことで皆が引用するたとえ話が、ヤコブがラバンの二人の娘を妻にした話です⁸⁸⁾。姉はレアといい、目が悪かった⁸⁹⁾が多産であったので活動生活を表し、妹のラケルは美しく愛らしかったが子供ができず、観想生活を表します。ヤコブはレアよりラケルを愛し、はじめに、7年の労働の報酬としてラケルを妻に欲しいと言ったのですが、まず姉のレアを娶らねばなりません。観想生活の前に活動生活を経験しなければならないというこれまでの話のたとえ話として、この話は多くの書物で明白にこの訓話として用いられてきましたので、この話は簡単にすませることにします。

活動生活と観想生活

しかし特にこの二つの生活形態、特に活動生活とそして観想生活について語ろうと思うとき、活動生活は、在俗、修道、学問を修めたか否かなど非常に多くの場合がありうるので語りつくすのは困難であり長い解説を要するでしょうし、またここでは必要ではないと思えます。

活動生活の一般的な実践は、第一にその人自身にかかわり、悪と戦い、徳を得ることに専心すること。また次に同輩の市民に関しては、慈愛の行いを実践すること、この世の物を余剰に持っている者はその程度に応じて施しを実践すること。これで十分だと思しますので、ここではこの話をこれ以上語ることはやめます。ただ、最後に、はじめに引きました活動と観想を象徴するマルタとマリアの姉妹の福音書の話の始まりにそってまとめましょう。

85) 原注：5.

86) 原注：Nota &c. 1. (注意事項1)

87) 原注：Figura.

88) 創世記，29:14-30:24. See Sargent, p.252, note 120.26-39: 'The moralization of the characters of Jacob, Rachel and Leah ... was a commonplace in medieval contemplative literature.' He refers to *A Tretyse of te Stodye of Wysdome tat Men Clepen Beniamyn*.

89) 創世記，29:17: Vulgate, 'Lia lippis erat oculis,' 'Leah was bleary-eyed.' Cf. AV: 'Leah was tender eyed,' 共同訳：「レアは優しい目をしていた。」

⁹⁰⁾第一に活動生活にある人は、マルタから、何をするにしても彼らにとって最も重要な徳、つまり慈愛を学びなさい。そして自分自身については、死に至る罪を犯さないこと。なぜならば、さもなければイエスが彼女の家に滞在し、彼女のもてなしを受けることはないでしょうから。⁹¹⁾またほかの人に対することについては、自分たちほど徳高い行いをたくさんしていないと見える場合もその人を裁いたり軽蔑したりしてはならないということ。なぜならイエスご自身がどのような裁きをなさるかはわからないではありませんか。イエスはマルタの懸命のもてなしよりも、イエスの足元に黙って座り込んで、怠けているようにも見たマリアの密な観想の方を喜び、好まれたのです。それはマリアが燃える愛情でイエスについて観想していたからですが、マルタのもてなし、懸命の世話もイエスにとっては大変好ましく、マルタにとっては報いの多いものでした。ただ、活動生活は善いが、観想生活はよりすぐれているということです。

⁹²⁾さらに次のことに注意してください。われらが主イエスがマリアを大いにほめられて、マリアの分担の方を好まれたけれど、⁹³⁾マルタは、ヨハネが後に福音書で記しているように、自分の分担を不満に思うわけではなく、そのまま自分の暮らしの形態を続け、いつもイエスとその弟子たちをもてなしました⁹⁴⁾。神に呼ばれ、活動生活を営む人は、観想生活の方が上であるといわれても十分の報いを感じ、不平を言うてはならないという証です。これら二つの生活の形態、段階がどちらであろうとも、神のみが、天の国の至福において前に立つ者をご存知だからです。

以上がマルタの分担と、彼女によって表される活動生活についてです。

⁹⁵⁾次に観想生活について。観想の生活にある人は、観想にもっとも必要な三つの点でマリアを手本にきなさい。それは従順、忍耐、沈黙です。

⁹⁶⁾まず従順は、マリアが地べた低く、われらが主イエスの足元に座ったということに表れています。観想の段階にいる人にとって、この場合の地面はその心の中にあります。つまり自分自身が聖人のようであると思いがってはならず、これまで従順に関してたび

90) 原注：Primum notabile actiuus. (活動生活の第一の注意点)

91) 原注：2^m notabile.

92) 原注：3^m notabile.

93) 原注：Martha more solito ministrabat. (マルタは黙従して [馬鹿みたいに] ひとりで切り盛りをした)

94) ヨハネ、11章、ラザロの死と再生の話でマリア、マルタの姉妹が登場する。まめに立ち働いているマルタの様子が伺われ、一方マリアはイエスが来ても、迎えに出かけず、家の中にじっと座っている。(11：20)

95) 原注：Notabilia contemplatoribus. (感想生活者の注意点)

96) 原注：Primum notabile. (第一の注意点)

たび触れましたように、心から自分がつまらない者であると軽蔑することです。まったく、さもなければ、観想の積み上げは、それほど高いものでもなくもしっかりと立つことができず、ちょっとした逆風ですぐに倒れ、無に帰するでしょう。

97) ここでの第二の美德は、真の観想生活の必要に応じて完全に棄てて軽蔑する世間からの誤解や軽蔑や責めを受けたときの忍耐です。常に心に忍耐を持ち、自分の弁護人であるイエスに主張をゆだね、マリアがファリサイ派の人に批判され責められたときにしたように、言い返さずに黙っていなさい。姉のマルタが彼女に不満をぶつけたときも、イエスの弟子が怒って不平を言ったときも、マリアは黙っていました。これは感想生活に必要な第三の美德で、そのようにマリアは沈黙の模範を示しましたので、福音書全体を通してわれらが主の復活のときまで彼女がしゃべったという記述はたった一回、兄弟ラザロが生き返ったときの短い言葉のみです。われらが主イエスが彼女に偉大な愛をお示しになり、マリアはイエスの言葉と尊い教えを聞くことに大きな喜びを得たので、当然それだけいっそう大胆に発言したいという気持ちに駆られたに違いないのに、マリアは沈黙を守ったのです。

徳高い沈黙の果実を知りたいと思う人は誰でも、本当の感想生活を愛し望むならば、書いたものを読んだり人から教えてもらったりするより、実践によって得るところの方が間違いない大きいでしょう。とはいえ、聖バルナルドゥス他多くの気高い教父、学者が沈黙の徳を尊い徳として高く推奨しています。

このこと、そしてそのほかの感想生活、特に隠修士について、また混合生活、つまり活動もするが観想もする、世俗にありながら霊的愛の恩寵に浴するさまざまな人々に関連する美德の実践について、もっと詳しく知り、英語で教えを受けたい人は誰でも、たいへん立派な学者であり聖者であるタルガトンの参事会員ウォルター・ヒルトン先生が英語で書かれた優雅で慎重な書物を読むがいいでしょう⁹⁸⁾。きっとこれらのすべてのことについての詳しい解説と真実を見出せます。御霊よ、永遠に安らかにあれ。先生はきっと天高く至福の中に住まれ、この世でマリアとともに追求した最も善い生活形態を完成したことによって、今、伴侶イエスと固くつながら、二度と別れないようしっかりと結び合わされていると思います。われらが主なる神イエスよ、わたしたちもその同士とさせたまえ。アーメン。

97) 原注：2^m notabile.

98) Walter Hilton, *Of Mixed Life*. (S. J. Ogilvie-Thomson, ed., *Walter Hilton's Mixed Life, Edited from Lambeth Palace MS 472*, [Salzburg, 1986]). Sargentは、*Scale of Perfection*にも言及している可能性を指摘している。*Scale*は*Mixed Life*と少なくとも15本の写本、印刷本と一緒に収録されている。*Mixed Life*が*Mirror*と一緒に収録されている写本がある点も指摘している (Manchester, Chetham's Library MS 6690)。Sargent, pp.252-53, note 122.34-123.4.